



## 「看とりの場で引き継がれるもの」

ホームホスピス「神戸なごみの家」の理事長松本京子さんのメッセージを今回は、みなさんと共有したいと思います。

看取りには1人ひとりのこれまでに生きてきた人生が反映されています。

ご本人が小さな声で発せられる言葉に思いがけない意味が込められていることもあり、はっとさせられます。私たちは、本人の言葉を「一言ノート」と呼ぶノートに聞き書きし、家族に渡しています。死にゆく人が人生の最期に発する言葉には遺された人を癒す力があると感じています。

看取りの場では生物学的な死とともに人としての固有の物語が終わり、残される人に、生きてきた思い出と一緒にバトンが受け渡されます。

暮らしの中で迎える看取りは、最後の呼吸の瞬間まで1人の存在として尊厳を尊重されます。過剰な医療を受けたり、安全のために拘束されたりすることなく、自然の経過に任せて過ごせるのです。

米沢慧（けい）氏（※）は、看取りは「看取る力、見送る力、息を引き取っていく人の力を合わせる」と述べています。

（※批評家。少子高齢社会の家族像を模索する「ファミリー・トライアングルの会」世話人）

社会の変化によって核家族が増え、高齢者の独居世帯も増え、家族の看取る力、見送る力は弱くなっている面もあります。

しかし、訪問診療、訪問看護、訪問介護など、さまざまな専門職が自宅での看取りを支援する活動は一定の成果を出して、独居でも自宅で最期を迎えることができると知り希望される人もいます。超高齢社会を憂えるだけでなく、看取りを地域に取り戻し、混乱の時代を生き抜いてきた人が暮らしの中で最期まで尊厳をもって逝ける社会となることに今後も取り組みたいと思います。

いつか、我が身にも訪れる最期のその時のイメージを今の内からトレーニングしていくことはとても大切だと思っています。命をかけて教えて下さるご利用者さまに、尊厳と敬意を抱きながら、愛と献身の心を注いでいけるよう、共に努力していきましょう。

今月も暑い中、お疲れ様でした。

2024年7月10日 呉 静恵

